

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
作文問題の極意・・・・・・・・・・・・・・・・	2
沖縄県高校入試問題の解き方・・・・・・・・	3
よくある間違い・・・・・・・・・・・・・・・・	5
レベルアップを目指して・・・・・・・・	8
おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・	10

〇はじめに

みなさんは国語の作文をどのように勉強していますか？また、どのくらい勉強していますか？「作文の書き方がわからない。」「作文は勉強してもしなくてもどうせ同じ。」そう思っていないですか？実は作文問題こそ、ちょっとしたコツをつかんで練習することで大きく点数を上げることができるチャンス問題なのです。しかも作文問題の配点は10点。60点満点の国語の問題で最も配点が高くなっています。にも関わらず、作文問題に苦手意識を持ち、最初から書くことを諦めてしまう人もいます。つまり、コツを習得してしっかりと対策を練った人とそうでない人の間で最も差がつきやすい問題であるということです。

そしてそのコツが詰まっている問題、それが沖縄県の高校入試問題の大きな特徴でもある「記述問題」です。「どうしたらいいか分からない」でごまかしてしまう人と、しっかりコツを知った上で取り組む人では大きな差がつきます。この冊子では、その「コツ」をみなさんにお伝えできればと思っています。

○作文問題の極意

その一 まずは書く！！

作文問題はめんどくさいしよく分からない・・・と避けてしまっている人！もったいないです。なぜなら、作文問題の配点は全教科・全問題の中で1番配点が高いからです。

だからこそ、とにかく書いてみる。指定された字数、何かを書こうとしてみる。書いてみれば、どこかで部分点がもらえるかもしれません。

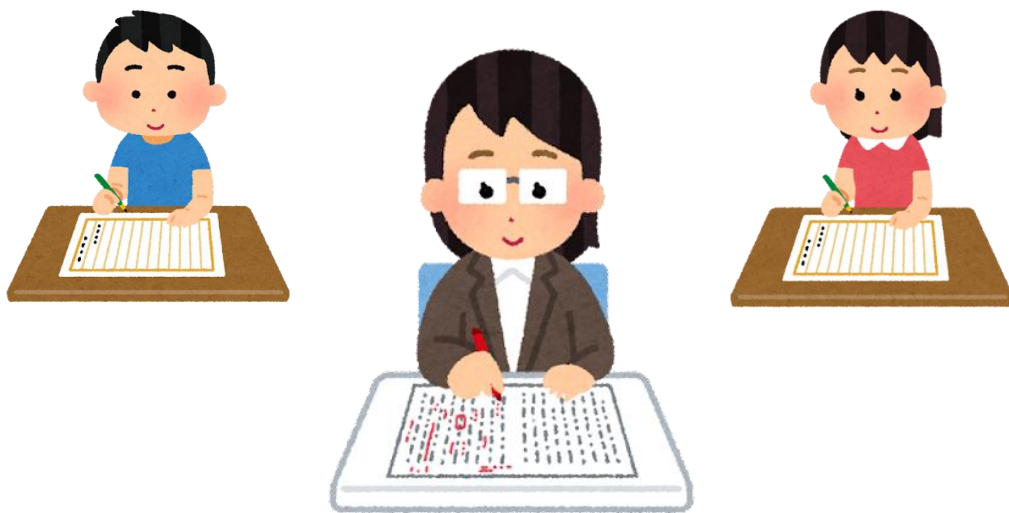
その二 採点者になったつもりで書く！

もしあなたが高校の先生だったら。

○丁寧な字を書く生徒と、雑な字を書く生徒、どちらが欲しいですか？

○見直しのされたきれいな文章と、誤字脱字だらけの読みにくい文章、どちらに魅力を感じますか？

○整理された作文と、何が言いたいかわからない作文、どちらに高い点数をつけますか？



・・・答えは明らかですよ。あなたたちが書いた作文問題を採点するのは高校の先生です。その高校の先生にわかりやすく伝わるように、丁寧さや一生懸命さが伝わるように、それができれば、自然と作文のクオリティは高くなってきます。

つまり大事なことは「もし自分が高校の先生（採点者）だったら」ということを想定して作文問題に挑むことなのです。

○沖縄県高校入試作文問題の解き方

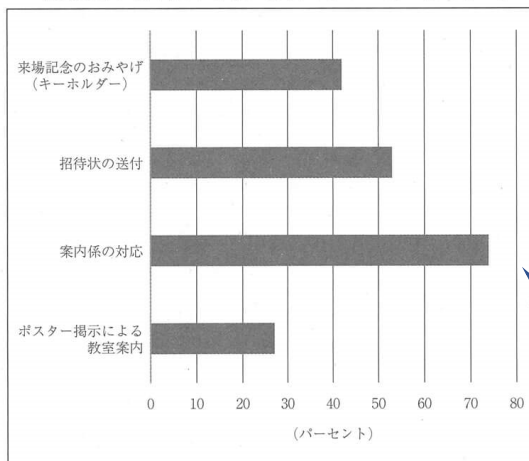
近年、沖縄県の入試問題では作文問題が2つ出題されています。その2つの問題の傾向を見極め、それぞれのポイントを押さえていきましょう。

I 「二つの資料を関連させて」問題

(例) 2020 年度・沖縄

【資料C】来場者アンケート (複数回答可)

「文化祭の取り組みで特に評価できることは何ですか」

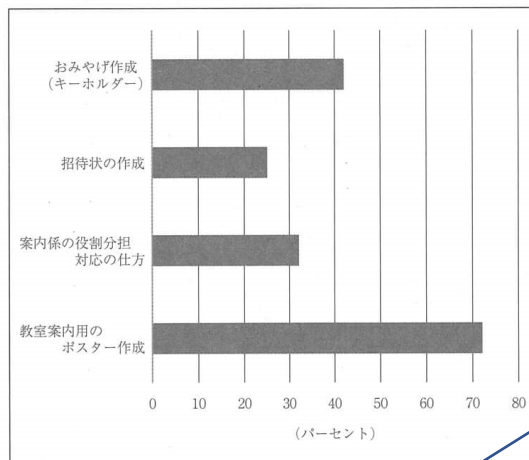


自由記述 (特に多かった意見)

- ・案内係に声をかけるとすぐに対応してくれた
- ・招待状があったので開催日が事前に分かった
- ・ポスターを見ても教室の場所が分からなかった

【資料D】文化祭実行委員 事後アンケート (複数回答可)

「特に時間をかけて工夫したことは何ですか」



自由記述 (特に多かった意見)

- ・ポスターを大量に作成できた
- ・案内係なのに積極的に声をかけられなかった
- ・招待状にプログラムを添付するべきだった

二つの資料を関連させて読み取れることを六〇字以上八〇字以内で書きなさい。※左の注意点を参考にしてください。

ポイント① 一番大事なのはココ！

必ず両方の資料について触れること！

この場合なら来場者側と実行委員側、両方の意見について作文を書けたらGOOD！

ポイント② 図の読み取り方

一番書きやすいのは、最も数が多い意見について書くこと！

(例) 来場者は案内係の対応について評価している人が多いが、……

ポイント③ 自由記述欄に触れるのも○

他の受験生と差をつけるなら、自由記述欄について書くのもよし！

(例) 実行委員の自由記述欄には案内係の仕事における工夫不足の反省も見られた。

Ⅱ 自分の考えを書く問題

(例) 2020 年度・沖縄

Ⅱで読み取ったことを踏まえて「次年度の文化祭をより良くするために必要なこと」というテーマで、次の〈条件〉に従って文章を書きなさい。

〈条件〉

(1) 次年度の文化祭をより良くするために①必要だと思うこと、②理由、③具体的な方法の三点について書くこと。

(2) 一四〇字以上一六〇字以内の文章にすること。

ポイント① 一番なのはココ！

自分がⅠの問題で書いた作文の話題と
同じ話題で書きましょう。

ポイント② 定番の「型」を覚えるべし！

接続詞を用いつつ、条件通りの順に考えを書きましょう。
そのためには下の例の「型」を覚えるのがオススメ◎

(例) 私は ① 案内係の対応においてさらに工夫をすること **が必**

要だと考える。なぜなら ② 今年度の文化祭では案

内係の工夫に課題を感じている生徒が多く、改善点がたくさんある

と感じた **からだ。そこで** ③ 案内係同士で事前に声掛け

や案内の練習をしたり、案内をする際に使う地図を用意したりして、

事前の準備に時間をかけること **が効果的だと考える。**

○よくある間違い



(1) 文体の揺れ

文体（文章の書き方）には以下のふたつがあります。

常体・・・「～だ。」「～である。」「～した。」などの通常の会話で用いる文体。

敬体・・・「～です。」「～ます。」「～しました。」などの丁寧さを付け加える文体。

作文問題は常体・敬体どちらで書いてもかまいません。大切なのは「どちらかの文体に統一して書くこと」！意識して書くとともに、最後の見直しまで念入りに行いましょう。

(例) 本塾生徒 A

Handwritten text sample showing a mix of plain and polite styles. The text is written in a grid. A box labeled '常体' (Plain style) points to the word 'いる' (iru) in the second column. An oval labeled '敬体' (Polite style) points to the word 'です' (desu) in the third column. Arrows from both labels point downwards, indicating the need for consistency.

どちらかの文体に統一しましょう！

(2) 普段使っている話し言葉では書かない！

作文問題は「書きことば」で書く必要があります。標準語で、なおかつ正しい日本語で書くように心がけましょう。次の例たちはよくある間違いです。

(例) 本塾生徒 B

い	利	と	っ	れ	な
ま	用	思	て	て	ぜ
す	に	っ	て	も	な
。	は	た	も	間	ら
	速	か	、	違	、
	さ	ら	そ	い	間
	と	で	の	だ	違
	か	す	情	と	っ
	正	。	報	意	た
	確	な	が	味	情
	さ	の	遅	な	報
	の	で	か	い	を
	両	私	っ	し	い
	方	は	た	、	く
	が	、	ら	逆	ら
	大	メ	役	に	早
	事	デ	に	も	く
	だ	イ	立	し	手
	と	ア	た	当	に
	思	の	ん	た	入

訂正版

だ	デ	立	が	れ	な
と	イ	た	当	て	ぜ
思	ア	ない	た	も	な
い	の	い	っ	間	ら
ま	利	と	て	違	、
す	用	思	い	い	間
。	に	っ	て	だ	違
	は	た	も	と	っ
	速	か	、	意	た
	さ	ら	そ	味	情
	と	で	の	が	報
	正	す	情	な	を
	確	。	報	い	い
	さ	だ	が	上	く
	の	か	遅	に	ら
	両	ら	け	、	早
	方	私	れ	逆	く
	が	は	ば	に	手
	大	、	役	情	に
	事	メ	に	報	入

上の例の中でも、特に「(文頭の) なので」や「～してる」はよくやってしまいがちな間違いです。作文はあくまで「書くもの」。普段使っている話し言葉で書かないように気を付けること、そして一文ごとに自分で見直しをすることが大切です。

(3) 「～たり、～たり、」は2つ以上のセットで使う！

よく使われる「～したり、」という表現。この「たり」という表現は、必ず2つ以上のセットでつかわなければならない、という日本語のきまりがあるので。

(例) 本塾生徒 D

× 「～たり」が1つしかない

「～たり」を2つ以上に！

なぜなら、すぐに最新の情報が得られ^{たり}、情報がさらに詳しく書かれてい^{たり}するサイトもあるからだ。



サ	ら	方	情
イ	れ	が	報
ト	た	良	を
も	り	い	得
あ		。	る
る	情	な	時
か	報	ぜ	は
ら	か	な	、
だ	さ	ら	イ
。	ら	、	ン
し	に	す	タ
か	詳	ぐ	ー
し	し	に	ネ
、	く	最	ッ
イ	か	新	ト
ン	か	の	を
タ	れ	情	利
ー	て	報	用
ネ	い	が	し
ッ	る	得	た

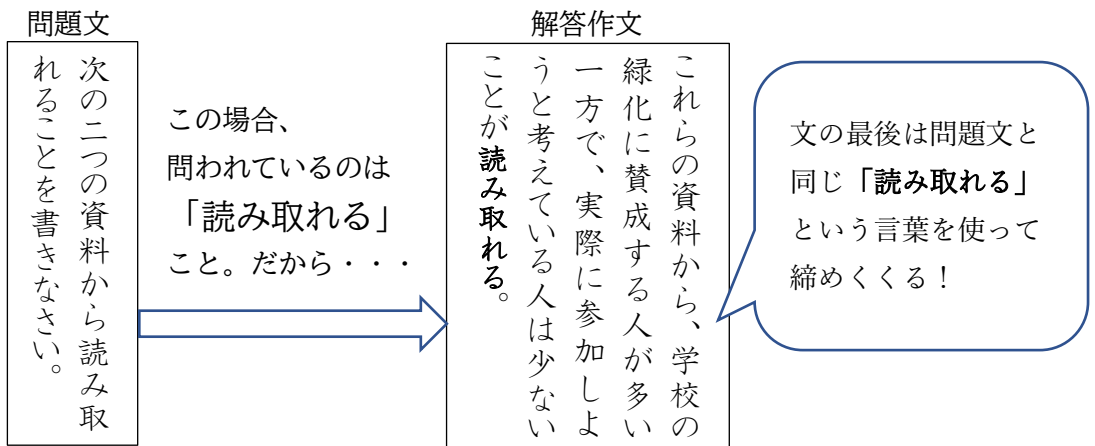
○レベルアップを目指して

他の受験生と差をつけるなら！以下の方法をぜひ取り入れてみてください。

(1) 問題文と同じ言葉を使って書こう。

作文の最後は問題文と同じ言葉を使って締めくくるとまとまりやすくなります。

(例)

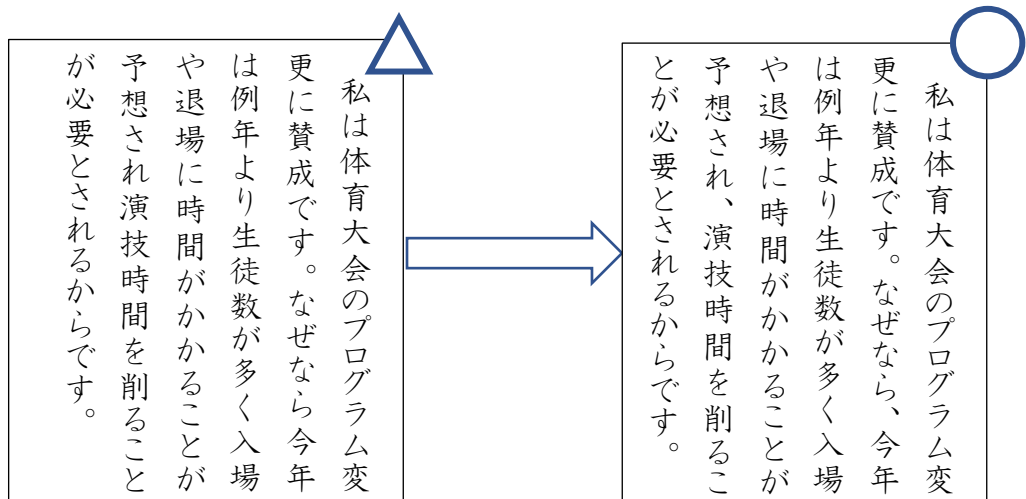


こうして問題文と同じことばを使うことで、採点者に対して「問題文をしっかりと読んでいますよ。」という前向きなアピールになるのです。

(2) 「、」や「。」を適切に使おう。

特に文章の質が変わるのは「、」の使い方。「、」の使いどころは息継ぎのタイミングと同じです。自分の書いた文を心の中で読み直し、息を吸うべき場所に「、」を入れてみましょう。

(例)



(3) 具体的なことばで書こう。

次の例を見てください。

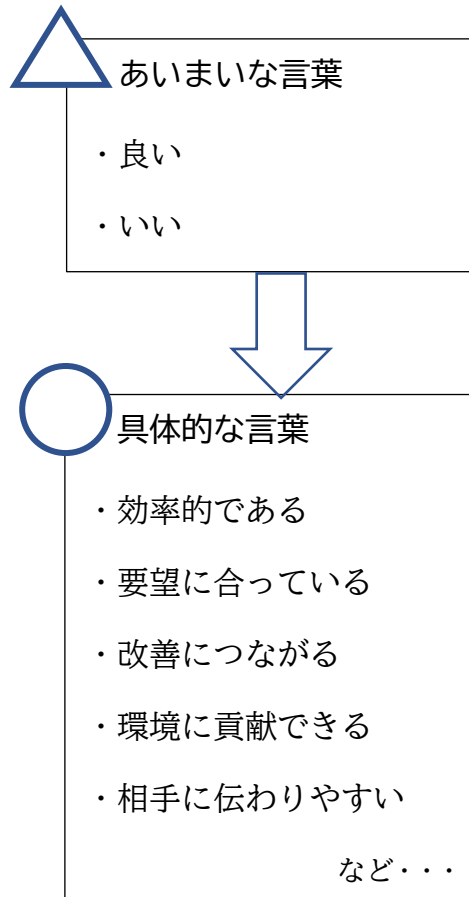
(例) 本塾生徒 E

イ	な	情
ン	ど	報
タ	の	で
ー	メ	得
ネ	デ	る
ッ	イ	た
ト	ア	め
ヤ	セ	に
テ	利	
レ	用	イ
ビ	ス	ン
ハ	る	タ
情	を	ー
報	良	ネ
を	い	ッ
多	ク	ト
く	な	ヤ
の	セ	テ
他	は	レ
の	ら	ビ

ここでの「良い」とはどのような意味なのでしょう？

作文問題の解答では、この例のようにあいまいなことばを使っているものをよく見かけます。ただ、このままでは意味がぼんやりとしてしまい、何が言いたいのが採点者には伝わりません。

作文問題ではできるだけ具体的なことばを使うことを心がけてみてください。



○おわりに

最後に、作文問題に挑むときに必ず必要な3つの要素をお伝えします。

1つめは、思いやりをもって書くこと。「作文問題の極意」でも書いたとおり、入試作文には必ず読む人がいます。そしてその読む人＝採点者です。読む人の存在を意識しながら思いやりをもって書くことが、自然と得点につながります。

2つめは、見直しをすること。人間は誰でもミスをします。誤字脱字はないか。接続詞を用いてわかりやすい文章を書けているか。「、」や「。」は適切に使えているか。など……。もったいないミスで大事な点数を落とさないよう、自分の文章を再度見直す癖をつけてください。とはいえ、最後まで書ききってから再度書き直すのは大変ですよ。一文ごとに自分の文を読み直しながらかくのもオススメです。

3つめは、作文以外の問題も手を抜かないこと。時間に余裕をもって作文問題に挑むには10～15分必要です。そのためには他の問題を（見直しも含めて）35～40分で解く必要があります。だからこそ過去問や対策問題に何度も取り組んで問題の傾向をつかみ、上手にペースをつかめるようになっておく必要があります。

「はじめに」でも述べたとおり、作文問題はちょっとしたコツを知っているかどうかが大きく点数を左右する問題。この冊子を参考に練習を積んで本番に臨んでほしいと思います。皆さんの健闘を祈っています。がんばれ受験生！